

平成27年千葉市教育委員会会議  
第1回定例会会議録

千葉市教育委員会

平成27年千葉市教育委員会会議第1回定例会会議録

日時 平成27年1月21日(水)

午後2時30分開会

午後3時30分閉会

場所 教 育 委 員 会 室

出席委員 委 員 長 和田 麻理  
 委 員 中野 義澄  
 委 員 内山 英夫  
 委 員 明石 要一  
 委 員 小西 朱見  
 教 育 長 志村 修

出席職員 教 育 次 長 田辺 裕雄 保 健 体 育 課 長 津野 政彦  
 教 育 総 務 部 長 米満 実 教 育 セ ン タ ー 所 長 遠 藤 悟  
 学 校 教 育 部 長 磯野 和美 養 護 教 育 セ ン タ ー 所 長 山 本 雅 司  
 生 涯 学 習 部 長 朝生 智明 生 涯 学 習 振 興 課 長 増 岡 忠  
 総 務 課 長 石野 隆史 中 央 図 書 館 長 松 尾 修 一  
 企 画 課 長 大崎 賢一 生 涯 学 習 振 興 課 科 学 教 育 推 進 担 当 課 長 西 村 安 正  
 学 校 施 設 課 長 真田 賢一 総 務 課 総 括 主 幹 小 名 木 啓 一  
 学 事 課 長 小川 彰 学 事 課 長 補 佐 布 施 善 幸  
 教 職 員 課 長 伊藤 剛 指 導 課 主 任 指 導 主 事 篠 塚 和 仁  
 指 導 課 長 山本 幸人 生 涯 学 習 振 興 課 主 査 補 三 橋 勉

書 記 総 務 課 長 補 佐 山本 春樹 総 務 課 主 任 主 事 佐 久 間 暁 子  
 総 務 課 総 務 係 長 渡 邊 実 総 務 課 主 事 荒 井 博 行  
 総 務 課 主 任 主 事 杉 山 隆

- 1 開会  
和田委員長より開会を宣言
- 2 会議の成立  
全委員の出席により会議成立
- 3 会議録署名人の指名  
和田委員長より明石委員を指名
- 4 会期の決定  
平成27年1月21日（1日間）ということで全委員異議なく決定
- 5 議事日程の決定  
議事日程を全委員異議なく決定

## 6 議事の概要

### (1) 報告事項

報告事項(1) 平成26年度千葉市農山村留学推進事業（県内実施）について  
山本指導課長より報告があった。

報告事項(2) 平成27年度千葉市立高等特別支援学校の入学志願状況について

山本指導課長より報告があった。

報告事項(3) 千葉市未来の科学者育成プログラムの成果発表会及び閉講式について

西村生涯学習振興課科学教育推進担当課長より報告があった。

### (2) 発言の要旨

報告事項(1) 平成26年度千葉市農山村留学推進事業（県内実施）について  
和田委員長 指導課長、報告をお願いします。

山本指導課長 報告事項(1)「平成26年度千葉市農山村留学推進事業（県内実施）について」、報告します。

本年度の5月11日から11月21日までの県内における農山村留学が全て無事に終了しましたので、全体を整理して報告をします。

まず目的にありますように、他人を思いやる心や社会性、自主性を育成することなどを目指して、92校7,605人が県内の5つの宿泊施設に分かれて、さまざまな体験活動を行いました。

実施概要にありますように、千葉市の少年自然の家が13校、君津亀山少年自然の家が1校、水郷小見川少年自然の家が4校、大房岬少年自然の家が38校、鴨川青年の家が36校であり、計7,605人です。

続いて、ホームステイについて報告します。昨年は18校、1,345人がホームステイを体験しましたが、本年度は28校に増え、2,030人がホームステイを体験しました。宿泊先については、南房総市では、富浦、岩井、白浜、千倉、和田地区の47軒で1,600人の受け入れに対応していただきました。鴨川市の場合は、大山地区にて7軒の農家民泊を受け入れていただき、371人がホームステイを体験しています。また、本年度より新たに大多喜町でも、2軒で59人のホームステイ受け入れが始まったところです。

続いて、主な活動内容についてですが、各施設の周辺の特徴を生かしたその土地ならではの活動が行われています。太巻き寿司づくりや、干し柿づくり、小見川少年の家でのシーカヤック体験、岩井海岸等や、鴨川の仁右衛門島での磯遊び、大多喜では、ホームステイに行く前の時間を利用して、大多喜城下町散策も行われています。また、本年度は南房総市で2校、鴨川市で2校の計4校が現地の小学校との交流会を行い、新しい交友関係を築くことができました。

今年度も受け入れ地区の方々のご尽力、引率職員の臨機応変な対応により、92校の全ての学校が大きな事故なく、充実した活動を終えることができました。

農山村留学を通じた県内の各地域の豊かな自然と人々との心温まる交流は、子どもたちにとって貴重な経験となったこと、農山村留学の準備から当日に至るまでの活動において、子どもたちが主体的に物事に取り組むようになったこと、また、親元から離れて生活することで自立心を高める機会になったことなどは、本事業の成果として挙げられます。

今後も本市の体験活動の体系に基づき、児童の安全に配慮しつつ、社会性や豊かな人間性を育成する事業にするよう努めていきたいと思っております。

明石委員 今日のご報告は県内のデータですね。私は、長野県に行った農山村留学と、千葉県内の農山村留学の体験で、どちらのほうがあるかをやはり知りたいのです。熊谷市長が、長野県も良いけれども、千葉県の地域を知ってほしいということをしきりに言っていますよね。そういうことに応えるためには、エビデンスがないと応えられないですね。今の課長の説明だけでもわかりやすいのですけれども、長野県の場合と千葉県の場

合にどちらが良いのか。保護者は、もし長野県が良いなら長野県に行ってほしいと言うし、差がなければ千葉県でも良いのではないかなどと言ってきますよね。そのようなデータはあるのでしょうか。

山本指導課長 本年度はまとめていませんが、昨年度、長野県と、県内、また、ホームステイの「有り・無し」で調査をしましたが。結果としては、「長野県のほうが良かった」、「県内のほうが良かった」といった、大きな差は出ていません。体験活動を通して、子どもたちの社会性等が育まれたというところはわかるのですが、大きな差は出なかったというところですよ。

明石委員 もしどのような質問項目で聞いたのかというデータがあれば、今度この委員会会議に出してほしい。そうしないと、今言われても、データがないので少々返答に困るのです。せっかくお金を投じて評判の良いことをやっているのに、それをもっと広めていきたいのです。

全国でも小学5年生で1泊2日と2泊3日の体験活動によって、どのような差があるかというのは文科省も持っていません。福島県では、県を挙げて1泊2日コースと2泊3日コースは本当に何が違うのかを調査しています。1泊2日の小学校が半数、2泊3日以上が半数で、文科省の学力テストでは、2泊3日以上の子のほうがB問題の正答率は高いというのがあります。しかし、ほかの面では差が出ていないというか、調査していません。

だから、ここで言うならば、千葉市は農山村留学で民泊をしていますが、それにプラスアルファで、民泊はどのような意味を持つかということ、ほかのところはやっていないからデータがありません。こういう短期農山村留学というのは千葉市がトップランナーとして走っているのだから、そのようなデータをとってほしい。これについては、私は委員になってからずっと申し上げていますが、チームをつくり、ある意味では体系的にやらないと駄目なのです。断片的な調査では、議会の方はみんな信用しません。中学校2年生で千葉村に行きますよね。それで、どちらのほうが千葉村の3泊に適應できるのか、また千葉市が小学校と中学校でやっていることの効果測定というのもやはり実施していただきたいです。

もう一点、未来の科学者育成プログラムでは発表会をしていますよね。この農山村留学の体験の6年生の発表会というのはない

のでしょうか。要するに、自分たちは分かっているけれども、ほかの小学校は何をやって、どうなっているかなど、そのような情報の交流というのが無い。もし今までやってきたならば、ブロックごとでもいいので、6年生の農山村留学の意見発表会を、もしやっていなければ、やってもらいたい。

それがこの年末の文科省の中教審で答申が出ましたが、体験を通して問題解決をして、考えて発表するというアクティブラーニングの一つの成果として、千葉市の場合は子ども議会もあるし、このような農山村留学の体験をみんなの前で発表していくという新しい学びを体験してもらうこともできるので、そういうこともやってほしいと思っています。

和田委員長 農山村留学に関しては、毎年報告書を配ってもらっています。26年度の分はまだ当然できていないと思うのですが、過去のものを見ると、もっとより詳しいことがわかるということですよ。

1つ目の質問に戻りますが、私もホームステイに関しては、やはり非常に教育的効果が高いように思うのですが、ホームステイは非常に手間がかかるとお思いますので、本当に民泊、または民宿にホームステイをするということが、どの程度違いが出てくるのかが知りたいと思っていました。

ただ、同じ子どもを測定するわけではなく、学校も違い、生活している環境も違うわけなので、比較が非常に難しいとは思っています。1点目に関して、もしまた報告書ができましたら見たいと思います。

2点目の発表の機会についてはいかがでしょうか。

山本指導課長 千葉市において、農山村留学については、場所は違えども、内容も少しずつ違って小学6年生全員が経験していますので、学校同士で発表会をやることは考えていません。

しかし、各学校では、総合的な学習の時間等を使って、次年度に行く5年生や、保護者に対して発表の機会を設け、「こういう準備をしてこうやってきた、こういうところが役立ちました」というような情報伝達の間を各学校の中で工夫して行っています。

明石委員 それも分かるのですけれども、例えば小学生が学校を代表して、市民会館で音楽発表会をするではないですか。学校によっては、各教室単位、学年単位だけれども、それなりに皆さんが頑張っていると思いますよ。だから、農山村留学というのは良いということを学校内でやり、そこで選抜してほしいと思います。そ

れをやったらやはり担任の先生方も何とかしなければいけないと思うでしょう。

こういうのは注目されるし、最初は物すごく勢いがあるのですよ。続けていると、何か言葉は悪いけれども、段々行事を消化しなければいけないという。今回、聞いてよかったのは、新卒の先生がついていくという新たな視点があって、良いことをやっていると思いました。そこで、新卒の若い先生が入ることによって、子どもにとっての効果は変わってくるのか、50代が引率したらだめなのかということも含めて発表してほしいと思います。せっかく合唱はあれだけ発表しているのに、何故農山村留学は発表しないのだろうと思います。

和田委員長 また、新たに時間をとることがなかなか難しいのかというような感じもしますが、どうでしょうか。

明石委員 だから時代が変わり、新しい学びが出てくるので、それに合わせて、教室で勉強して記憶していくという従来どおりの発想だけではもうだめだという中教審の答申をぜひ読んでいただきたい。それに対応して、千葉市は今やっていることを少し延長させ、その先導として動きをやっていけば良いでしょう。新たに予算化するのにはなかなか難しいと思いますよ。

和田委員長 お話のとおり、私も以前話したことがあるのですが、日本語で何かを発表するという弁論大会のようなものが、千葉市の場合、教育委員会主導では行われていないのですよね。それがあると、もっと発表の機会が増えて良いのではないかとはいっているのですが、それが農山村留学のことなのか、もっと他の、子どもの主張のようなことなのかというのは、またちょっと考えてもらいたいと思います。中学生の英語発表会は非常に立派な形でできていますが、ただ英語ではなく、もう少し早い段階で、日本語で自分の考えや研究したことを、学校内だけではなく、他校の子どもたちを交えて、千葉市全体での発表の機会があると、やはり自分で表現できる力というのがもっとついてきてくれるのではないのかというのはかねがね思っています。少々話がそれましたが、検討事項として考えてほしいと思います。

志村教育長 これ以上忙しくはできません。その分だけ、小学生が集まるのはやはり難しいので、音楽会も小さいブロックの中で小学校等を会場に実施し、中学校になってやっと市民会館ということで、実施しています。このためにまた選抜なり何かしてやるとなると、

かなり学校というか、子どもの忙しさが増えるので、それで私もそのかわりに、例えば「ともしび」という文集の中で、子どもたちが描いた農山村留学の経験などを書き、それを見合う、読み合うことによって、情報を共有化していくという方向は考えています。しかし、千葉市は大き過ぎて、成人を祝う会を見てわかるとおり、あれだけの人数が集まると、整然としない状況が出てくる中で、どうやって実施するかということはいろいろ考えなければいけないと思います。やはり区単位など、できる範囲の中で学校、それから子どもたちに負担をかけないような形で、そのような経験ができればと思っています。

先ほど話があったように、一人の子どもが両方行くならば、そこで比較ができるわけですが、それぞれ自分の体験が一番良いと思っているわけで、あっちのほうが良かったとしないようにしなくてはいけないという難しいところもあります。スタートしたときには、小規模の学校が一つの中に集まって、交流することが足りないところが交流してきたという、これは確実に成果は出ています。

ただ、色々な面で見直しは確かに必要な時代になっていますし、経費等の問題も出ていますので、今、根本的に学校教育部でこれについては考えていかなければいけないと思います。ただ5年、6年継続しているところというのは極めて少ないので、その成果についてだけは少しきちんとした評価だけはする必要があるかと思っていますので、今、明石委員の話があったとおり、少し評価のやり方を考えて、また進めたいと思います。確かに体験をすることによって子どもたちが変わるという報告はたくさんもらっていますので、保護者の意識調査も含めて、少し検討させてほしいと思います。

明石委員 いや、分かるんです。分かりますが、私が申し上げたいのは、今の6年生からセンター試験が消えるのですよ。そうすると、色々な体験をして、それを自分で考えて表現して訴えていく力が6年後には必要になり、保護者はもう先を読んでいるのですよ。何もなくて作文を書いてもつまらないのですが、千葉市は農山村留学という非常にインパクトのある体験をしているので、それを言語化してみんなの前で発表するというのを千葉市が先導的にやってみると、世間から注目されて人がたくさん千葉市に移ってくる。そういうことを市長は言っているわけですよ。

忙しいのは忙しい。だから、どこかは削らなければいけないですよ。そうやって、千葉市の教育はこれからどういう方向づけをするかということを押さえておかないと、あれもこれもだと教員が苦しいだけです。今委員長が話したように、本当に日本人は発表する力がなく、後手後手に回っているのです、そういう意味でぜひ、学校教育部で、こういうことも含めて検討してもらいたいのです。

和田委員長 今、明石委員から話があったように、本当に1年、2年先のことではなく、ずっと先のことも大きく変わっていくだろうと、大学入試の方法が変わるなど、そういったことも含めて足固めをしていかななくてはいけない時期だと思いますので、先を見ながら、できないと言い切らないで、頭を柔らかくして考えていきたいと思っています。

内山委員 私もこのような体験は大変大切だと思いますし、どんな人も自分の体験を通して初めてラーニング意識というか、考え方に影響を与えると思うのですね。

1つお聞きしたいのは、今年大多喜町を新規に追加され、この辺の苦労があると思うのです。どこまで拡大できるか分かりませんが、今後も少しずつでも増やしていく考えはあるのでしょうか。

山本指導課長 民泊については、各学校の考えで実施するところと、実施しないところがあります。ただし、受け皿としては、やはり応じられるようにしていったほうが良いとは思っています。子どもを預かるというのはなかなか抵抗がありますし、場所の関係もあります。今後増やす方向では考えていきたいのですが、簡単には増やしていけないところです。それよりも、鴨川青年の家や、大房岬少年自然の家に集中している面もあり、それぞれの場所で、また他のところでも特徴的な運営と活動ができないかも探っていきたいと考えているところです。

和田委員長 現地での他市の小学校との交流というのも、恐らく子どもたちにとっては非常に刺激があると思いますので、大変だと思いますが、それも並行して拡大、発展を考えてほしいと思います。

小西委員 活動内容を見ていると、結構アクティブな活動が多くて非常に良いと思うのですが、過去に事故や、大きなトラブルはないのですか。今年はなかったと思うのですが。

山本指導課長 県内実施においては大きな事故というのは報告されていません。以前、長野県において、ホームステイ中に子ども同士のトラ

ブルで、頭を骨折するという大きな事故がありました。ホームステイとはいってもペンションのようなところに15人泊まっており、また、担当の教員が一人もいないときに起きた事故でした。今回の県内実施においては、民泊でも10人以上泊まる場合は指導者も一緒に泊まり、何かトラブルがあったときにもすぐに対応ができるように配慮をしたところです。

小西委員 質問をしたのは、数年前に高原千葉村の事故があったかと思いますが、結局あれは、大人である教員が自分で危険だと思うところにしか大人を配置せず、子どもの目線で危険だったところに配置しなかったことが、問題となったと聞いています。今後実施していく上で、養老溪谷のハイキングなどもありますので、やはりこのような場所では子どもは興奮して大はしゃぎして、突拍子もないことをするということを十分に認識した上で、子どもの目線で本当に危険な所はないかどうかというところを十分に注意して実施してほしいと思います。

和田委員長 本当に、子どもの目線は大人になると一番難しいところだとは思いますが、身長を低くして見てみるなどは、非常に大事なことだと思いますので、念を入れていただきたいと思います。

山本指導課長 分かりました。

報告事項(2) 平成27年度千葉市立高等特別支援学校の入学志願状況について

和田委員長 指導課長、報告をお願いします。

山本指導課長 報告事項(2)「平成27年度千葉市立高等特別支援学校の入学志願状況について」、報告します。

平成27年度の千葉市立高等特別支援学校入学者選考については、12月3日から5日まで、願書の出願受付を行い、その後12月15日から17日まで、志願変更期間を経て、入学志願者数等を確定しました。

平成27年度千葉市立高等特別支援学校入学者選考の志願者数及び倍率については、募集定員32人に対して志願者数51人、倍率1.593倍となっています。男女別志願者数ですが、男子が29人、女子が22人です。

今後の日程については、県立の高等特別支援学校の入学選考検査と同一日程で実施します。具体的には、平成27年1月15日、16日に入学者選考検査を実施し、1月22日に選考結果を発表します。

入学者選考検査の内容は、作業能力検査・学力検査・運動能力検査・面接で実施し、志願者の適性、意欲等を総合的に判定して行います。

今回32人の定員に対し、51人の募集がありました。入学許可候補者数が定員に満たない場合は、資料に記載のように行うという参考です。

なお、志願者数及び倍率については、千葉市教育委員会指導課のホームページに掲載しています。15日、16日の入学者選考には、51人の志願者全てが受検をしたという報告を受けています。

中野委員 この志願者数ですが、去年は志願者数が募集定員を割れていたのが、今年は随分増えたことについて、何か思い当たるような原因があるのでしょうか。

山本指導課長 今年が初めてではないのですが、生徒、保護者、担任を対象に6月、7月、9月に学校説明会及び見学会を行い、40人ほどの生徒が参加し、45人ほどの保護者が来たと報告を受けています。

一方、中学校の教員にもよく知ってもらうため、中学校の教員対象の学校説明会等も実施をしています。学校を公開することによって、子どもたちが生き生きと作業学習等に取り組んでいる様子が広く知れ渡られてきたのではないかと思います。

また、毎週水曜日の午前中に、農園芸班が育てた野菜や花を地域やマリンカフェの前で売ったり、7月16日には「コト・モノマーケット」に参加をしたり、火曜日と木曜日の午前中にマリンカフェをオープンして地域の皆さんに、コーヒーやシフォンケーキなどを焼いて出したりという活動を、広く告知できたのではないかと思います。また、11月22日には文化祭である「光 toku 祭」が行われ、そこでも学習発表、販売会が行われたとともに、校歌・校章制定式等も行ったところです。

さらに、「千葉県特別支援学校清掃検定」に参加して、生徒が金賞を受賞し、その記事が読売新聞の千葉版に掲載されるなど、高等特別支援学校の活動、そして生徒の活躍が広く知れ渡ってきていると考えています。

和田委員長 今年、この子どもたちが入学すると3学年そろふことになりますね。そうすると、やはり作業の種類が広がるなど、そういったことも含めて理解がより得られて応募者数が増えている

こともあるのでしょうか。

山本指導課長 今年から6つの作業班にしました。今後は作業班を多くするというのではなく、3年間のうちに1つ体験して、本当にやりたいものをまた選んで体験して作業を行うというようなところだと思います。現在、子どもたちを応援するために約62社の企業が登録してくれており、そのような企業の力を借りながら、校外での実習などを重ねていき、卒業後の就職にもつなげていければと考えています。

和田委員長 倍率が高くなったのは一般的には非常にうれしいと思うのですが、一方で落とさなければいけないというのが、特に特別支援学校の場合は気になるところなので、そこが少し忸怩たる思いがあるのですけれども、最終的にこの32人という定員をこれ以上増やすというのは難しいことなのでしょうか。

山本指導課長 個々の生徒の安全も確保しながら作業学習を中心に行うというところもあり、また、知的障害の軽い子どもを対象にしていますので、今のところ32人が適正だと考えます。しかし、今後、子ども達の活動やニーズに応じて考えていきたいと思っています。

磯野学校教育部長 これは県が平成23年3月に千葉県の特別支援学校の児童生徒数統計を全部とって、千葉市にどのくらいの人数の特別支援学校があれば良いかということで示されました。千葉市は190人位という数字がありましたが、既設の養護学校を分析し、およそ90人で足りるということから、この96人を割り出しました。県は整備計画に伴って多分来年は3校できると思いますので、現段階ではそれぞれ適正なところに生徒が入学し、適切な指導を受けて、就労に向けた中で取り組まれています。なお、この子どもたちも不合格になった場合には、市立の養護学校できちんと受け皿が用意されていますので、その中で指導を受けていくという形になります。

和田委員長 県立と、それから市立養護と、この高等特別支援学校と全てで、どこかで、必ずその子に合った教育が受けられるということですね。わかりました。

志村教育長 12学級というのが高等特別支援学校の適正規模であり、1学級8人の4学級1学年ですから、32というのは8掛ける4と考えてもらえると少しわかりやすいと思います。ただ、19人オーバーすることは間違いありませんが、住居によって高等特別支援学校の高等部に上がる子どもと、市立の養護学校の高等部に上

がる子どもに分かれるということもありますし、どこも行き場所がないということは絶対ありませんので、安心してほしいと思います。

和田委員長 わかりました。

志村教育長 ただ、問題は、去年倍率が低かったから、易しいと思って出願した。去年の少なさを知っていれば、また来年もっと少ないかもしれないというのはあるかもしれませんが。だからいろいろ、学校を選ぶ生徒たちの要望はあるとは思いますが、高等特別支援学校も市川や、市原など県内にいろいろとあり、こういうお子さんもいるだろうから、やはりその中を選んだ上で今年51人来たということは、それだけ教員が努力をしたのだろうと思います。

和田委員長 去年の倍以上にはね上がりましたからね。

志村教育長 そう。去年はびっくりしましたから。

### 報告事項(3) 千葉市未来の科学者育成プログラムの成果発表会及び閉講式について

和田委員長 生涯学習振興課科学教育推進担当課長、報告をお願いします。

西村科学教育推進担当課長 報告事項(3)「千葉市未来の科学者育成プログラムの成果発表会及び閉講式について」、報告します。

1月10日(土)に、千葉市教育センターの講堂で行いました。

午前中は成果発表会、午後に受講生代表5人の全体発表、それから閉講式が大きな流れです。

このプログラムの概要を簡単に触れますが、6月21日に市立千葉高校で開講式を行いました。総合コース、千葉大学連携コース、医療系コース、市立千葉高校SSHコースの4つのコースを設定し、各コースおよそ10回程度の講座を実施したものです。

今年度新たに設けた市立千葉高校SSHコースは対象が中学2年生、中学3年生に限定されたコースで、物理、化学、生物、地学、数学、それぞれの内容について、高校の教員に実験、講義等を展開してもらいました。また、千葉市動物公園でのポスター発表など、非常に発表に関して重点を置いた指導をしたのは特色かと思います。

成果発表会、閉講式の概要について報告します。当日、欠席者もあり、51人が参加しました。中学2年生が31人、中学3年生が3人、高校1年生が17人です。そのうち中学3年生については入試のために、この口頭発表を免除をしており、実際に発表

をした受講生は49人となります。役員、コメンテーターとして、市教育委員会の職員、教育センターの職員、並びに通称「学理の会」と呼ばれる「千葉県学校理科教育を支える教師の会」に所属している教員も参加しています。さらに保護者、中学生の科学部員を引率した教員3人ほど、一般の方を合わせておよそ30人、総勢で100人ほどの発表会になりました。今回、メールを活用し、ICT化を推進したことになりますが、ワープロのソフトをもとに成果報告書を提出したり、それから当日使った発表のスライドについてもメールで添付し、送信したようなことで、事前の段階の支援を多少したところです。

では、写真で以下、紹介します。ここにあるのは全部午前中の発表会の様子で、1部、2部、3部の3回に分け、4つのグループに分かれての同時の発表としました。一つのグループには12、3人の受講生がおり、その中には4つの各コースの受講生が混ざっています。一人7、8分の発表をし、その後、2、3分の意見交換及び助言・指導を行いました。当日は実際に育成プログラムの中で指導いただいた大学教授の先生方にも参加してもらい、指導・助言をいただきました。

午後の部では多くの来賓の方にもご出席いただき、行われました。午前中、4つのグループに分けて発表した中から優れた発表をした代表者5人による全体発表を行いました。代表生徒になりますけれども、グループが4つなので実際は4人ですが、非常に甲乙つけがたいということで実際には5人が発表しました。

続いて、1年間の振り返りということで、私たち科学教育担当でつくったスライドを見て、最終的に1年間を振り返りました。

その後、閉講式では修了証書を授与、呼名したときに1年間の感想、それから将来の希望を一言で話しました。

また、午後発表した5人については教育長から優秀賞ということで表彰しました。続いて、今回連携機関を代表して、来賓の千葉大教育学部の副学部長の山野教授に挨拶をいただきました。さらに今回、育成プログラムの中で講師として指導いただいた方が来賓として多く来られましたが、来賓紹介の中で一言ずつ助言等いただいたことも大変ありがたいことだと思っています。最後に受講生を代表して、感想、それからお礼の言葉を発表しました。以上が閉講式の流れになります。

次に、当日及びこれまでにアンケート調査をしていますので、

その結果の集約が進んでいる部分について紹介します。およそ30回になりますが、毎回の講座で「楽しかったですか」、「ためになりましたか」の2つを聞いています。毎回「楽しかった」、「ためになった」はほぼ同じですが、「とてもそういうふうに思った」、「とても楽しく、またためになった」と言った生徒は、「よい」と「とても」を合わせますと、およそ96から97%になります。ですから毎回の講座について、非常に受講生に満足してもらえたかと思えます。

続いて、1月10日の閉講式の後、回収したアンケートについてです。これは、この育成プログラムを総括する調査内容なのですが、「受講する前と比べて理科や数学に対する学習意欲や能力が高まったと思うか」という問いに対して、半数の受講生が「とても高まった」と回答しています。さらに「高まった」としている受講生が45%、合わせて95%ですので、このプログラムの有効性というか、成果についてはある程度確認できたかと思っています。

次に、今回「参加して、理科や数学についてどれくらい高まりがあったのか」を、項目に基づいて聞きました。上からポイントの高いものを並べており、上にある項目ほど高まりがあったという項目になります。そこでこのプログラムで一番高まりがあったと思っているのは、興味・関心に当たる内容で、やはり実験や観察などの興味、さらに理論や原理への興味、好奇心などが一番高い項目でした。

2番目は、考える力、探究心、問題解決力、発表力など思考や表現に関する内容で高まったという項目でした。

それから生き方・姿勢にかかわるものは、ポイントとしては一番低く、やや少なめに感じられるかもしれませんが、「とても高まった」、「高まった」を合わせると、ここに書かれている全項目が70%を超えています。特筆的などころとしては、「学校の勉強に対する意欲や姿勢」が高まったという回答が83%あります。また、「問題を解決する力」が下から2番目の項目になっており、今後のプログラムを編成していく上での課題になるかと思っています。さらに、一番下の項目の「仲間と協力して取り組む姿勢」は、このプログラムの中では実際そのような状況があまりありません。協力して実験するという状況はありますが、そういったところで協力した仲間関係に対して満足しているという受

講生も結構見られました。

次に、この「育成プログラムに参加してよかったことはどんなことですか」ということで、同じように調査したものです。これもポイントの高かったものが上に来ています。そうすると、「学校でできないレベルの高い実験や実習ができた」、「新たな科学知識、考え方がわかった」、「レベルの高い講演や講義を受けられた」といったところが上位3つ目までになり、特にポイントが高くなっています。

それに続いて、次は「データを分析する力」、「実験操作・実験方法が身についた」、いわゆる技能に当たるようなものや、最後、「結果が出せた」というような技能面が2番目になっています。それから3つ目の大きな枠で言うと進路に関する項目が、良かったこととしてのポイントは下がっています。実際には「理系に進むことに自信が持てたこと」、「将来の進路の目標が具体的になったこと」が、全般からするとポイントが低くなっており、やはり中高生は、進路について悩んでいるとか考えている時年代であることを表しているような感じがします。

一番最後、「仲間とのネットワークができたこと」は、このような部分についてこのプログラムの中では特別に行っているものではありませんが、これが良かったとしている受講生も6割近くいました。

次に、「来年度充実させたりするとよいこと」という問いに対して、やはり受講生は何よりも「実験・実習を充実させてほしい」という回答が一番ポイントが高く、次に、「講義・講話」となっています。それからこれは最初意外に思いましたが、「進路や職業選択に関する相談の機会」が3番目にポイントが高くなっています。先ほどの項目と一致しますが、受講生にとって、講座を受けながらどのような方向に進もうかということをやったり迷っている。またはそのような情報が知りたいということも今回うかがわれました。一番ポイントの少なかったものは、「講座の回数や期間について」で、ほぼ10回程程度の回数が適切であると考えています。

また、「来年度も育成プログラムにもう一回参加したいか」という問いに対して、およそ3分の1、17人の受講生が来年も希望するので、受講案内を下さいという回答でした。来年は違うコースをやりたいという方が多かったです。

今回、千葉大連携コース、市立千葉高校のSSHコースを選んだ受講生対象に「千葉大や、または市立千葉高についてさらに興味・関心が高まったのか」を聞いたところ、「とても高まった」「高まった」を合わせると92%になっています。

最後に、将来の希望については、理系希望は93%に対し、文系希望が7%です。学部についても今回、3つまでの複数回答で聞いたところ、理学部に希望が一番多かったです。理系希望が多いことがよくわかりますし、なぜ理学部が多かったのかということですが、やはり中学生にとって理学部の内容、物理、化学、生物、地学、数学は非常に身近でわかりやすいのではないかと考えています。

いずれにしても、今回非常に様々な連携機関、また先生方にご協力、ご支援いただいたことに感謝申し上げたいと思っています。

中野委員 今回で3年目でしたよね。そのコースを受けた生徒たちが実際に大学を受けて入ったという例は無いのでしょうか。無いのでしたら、今後、実際に医療系コースから医学部に何人入ったか、総合コースから、またはどのコースから理学部に何人入ったかわかるようにして欲しいと思います。

西村科学教育推進担当課長 3月には大学に進学することがわかっている生徒がいますので、追跡をする予定です。

和田委員長 中野委員の講座を受けた受講生が医学部に進んでくれるとうれしいですね。

明石委員 いや、非常にわかりやすい説明です。こういうイメージが描けると、あることをやって、1年経ったときにどういう成果と問題点が見えたかというのが非常に分かりやすいですね。

そこでお願いしたいのですが、このおよそ30回の中で、私は最後の成果発表会は参加しなかったのですが、12月20日のクロススクールサイエンスフォーラムに参加しました。一番良かったのは中高校生が発表した後に、上野先生初め、専門家がコメントを述べたのです。そのコメント集を冊子にして中高の先生方に配ってほしいですね。要するにそういうコメントで興味を持って、どのような発表をしたかに興味を持ってほしいのですよね。

ということは、簡単に言いますと、上野先生は世界を視野に置いていますから、中学生の発表は面白く、大胆で、アメリカで発表した場合に、中学生的な発想は独創性があって良いと言っていました。高校生は特に教師の意識や、人のことを考えて丸くまと

まってしまうと、非常に上品になってくる。これは日本の悪い理科教育だと言っています。あのようなコメントは、日本の学校教育が有する弱さを批判しているわけですよ。だから世界では通用しない。そこで中学生の荒々しい大胆な発想を、どうやって伸ばしていけるかというのが、これからのまさにグローバル教育であり、未来の科学者というのはそれを狙っているわけですよ。その辺のことで、今回の閉講式のときも上野先生が見えていましたから、野村先生も含めて、コメントのエッセンスだけでもまとめてくれると良いと思います。

もう一点は、これは去年も課題になったのですが、中学3年生が0ではなくて、4人も参加してくれています。この4各人がどういう3年生かを時間があればケーススタディーで調べてほしいと思います。受験と戦いながらここに来てくれたのは、希望の星というか、ご両親の理解があったのか、本人が好きだったのか。大体やめるので、すごいですよね。

西村科学教育推進担当課長 今回の段階でわかっている部分では、多分2人は昨年度の受講生であるリピーターで、SSHコースに入っております。

和田委員長 明石委員からのお願いがありましたので、少しそのあたりも考えてほしいと思います。私も閉講式のときの先生方のコメントは、本当に厳しくも温かい励ましの言葉が多かったので、多分子どもたちにも相当心に響いたのではないかと思います。

内山委員 3回目でこれだけ充実した内容になったというのが素晴らしいと思います。特に志願した生徒たちが一生懸命学習し、1年かけて自分で研究してまとめて発表するという体験は非常に大切なことだし、良いことだと思います。特にコーディネーターが、一人一人の発表に対してコメントするのですが、あれも的を射ており、聞いていて、ああ、良いなと思いました。特に中学生は、「なるほどな、気がつかない点があったな」ということを言っていました。そういった意味で、良い内容だと思います。4回目もまた期待したいと思います。

志村教育長 このコースは1年目、2年目、3年目、受講生は増えているのですか。来年どうするのですか。

内山委員 27、77、65かな。

西村科学教育推進担当課長 2年目の昨年度に77人受講しており、今年度が65人ですので、少々少なくなっています。

志村教育長 ということは来年も受講生の応募があれば、一応全員を受け

入れるということで考えているのですか。

西村科学教育推進担当課長 一応来年度も同数くらいを考えており、多少は多くても対応できるかと思いますが、発表会の会場の広さなど色々な物理的な条件もありますので、急激に増やすことは難しいと思っています。

和田委員長 コースの編成や、対象学年に関しては来年も今年と同じで考えているのですか。

西村科学教育推進担当課長 実際そこは検討しています。後日お知らせをすることになるとと思いますが、やはり探究活動に関する部分については不十分であり、興味・関心に対してどちらかというウエイトを置いているような状況ですので、それに対応できるようなプログラムの充実を検討しています。

和田委員長 わかりました。それで、周知に関してですが、先日市のPTA連絡協議会の20人くらいの方たちと意見交換会を行ったとき、このプログラムをご存知の方が2人しかいなかったのです。PTAの活動をととても盛んにやっという方でもそうだったので、周知が行き届いていないのは大きな課題だと思います。ただ紙を配るだけではだめなのだとするところなのだろうと思います。アイデアがあつたら私たちからも出していき、一緒に考えていきたいと思っています。

西村科学教育推進担当課長 PRについては検討したいと思っていますし、じかに足を運ぶことも考えています。

和田委員長 よろしく願いいたします。余り増えても困ってしまうかもしれませんが、知っていただくことがまず大事だと思います。

## 7 その他

(1) 給食について、明石委員、和田委員長より所見が述べられた。

明石委員 今日、市長のツイッターでショックを受けたのですが、ある人が「学校給食でこれだけ金がかかっているのか」という問いで、市長は、「そうです」と答えていましたが、なぜ教育委員会はそれを市民に紹介していないのでしょうか。例えば川崎市が中学校の完全給食を実施しようとしています。全体で200億円かかるのですよ。そういうのを一般市民は知らないで、千葉市はそれをやっているのにクーラーがないなど非常に文句を言われています。そこで言いたいのは、私も含めて、教育委員会が良いことや、お金をかけてやっていることを、今後どのような形で、保護者はもとより市民に紹介していくかということが課題だと思います。その辺は、例えば川崎市の場合は200億円というのは私でも知

っているのだから、千葉市の場合は、中学校用に学校給食センターをつくり、相当にお金をかけています。そういう何か数字をわかりやすく伝えるようなことをしてもらえると、市長のツイッターに文句を言えるのだけれども。

和田委員長 最近、「教育だよりちば」がとてもわかりやすくなって、非常に良い紙面になったなと思っています。また、先日作られたA3判の「千葉市で学んでよかった 地域のお友達と楽しく通う充実した公立学校と教育環境」のもう少しコンパクトな内容を基にもっとインパクトのあるA4版の一枚で全部わかるみたいなものがあると良いと思いますが、とにかくPRですよ。

明石委員 だから、そのような力があるのですから、ぜひ学校給食のことを市民にわかりやすくPRしてほしいと思います。本当に皆さん頑張ってくれているので、少し気になりました。

(2) 平成27年千葉市成人を祝う会について、和田委員長、小西委員より所見が述べられた。

和田委員長 成人を祝う会については皆さんいろいろ思うところがあると思いますが、1年目で、初参加の小西委員、どうぞ代表でお話ください。

小西委員 厳しいことを言って良いのでしょうか。実行委員の方がいろいろ頑張っていたいて、非常に良い企画をしていただきました。「千葉ットマン」も登場し、とてもびっくりしておもしろかったと思いますし、「かそりーぬ」が、あのように大勢の前でクイズ形式にしてPRすると結構良いなと思いました。

和田委員長 実物が出てくるともっとよかったですよね。

小西委員 そうですね。ただ、私は弁護士なのでいつも法律を調べるくせがあるのですが、成人を祝う会へ出席する前に、成人の日はどのような定義なのかと思って、国民の祝日に関する法律を見てみました。そうしたら成人の日というのは、大人になる自覚を持った若者がこれからの社会を生き抜こうとする、そのような若者を祝って、お祝いして励ます日と書かれていました。でも、実際出席してみると、やはり単なる同窓会というか、ファッションショーのような印象を受けてしまったので、今一度成人の方には成人の日の定義からしっかり認識してほしいなと思いました。

和田委員長 ありがとうございます。初参加の委員が必ず持つであろう感想を持たれたのだなと思いました。またそれぞれ意見を持っていると思いますので、こども未来局等にも意見をぶつけてほしいと

思います。

(3) 次回第2回定例会は、事務局において日程を調整の上、開催日時を決定することとした。

## 8 閉会

和田委員長より閉会を宣言